



はぶきよしのぶ / 1951年東京生まれ。75年創価大学経済学部卒業。同大大学院に進むが、三カ月後派遣留学生として渡米。そのまま米国に滞在し、80年南カリフォルニア大学修士課程修了。84年ワシントン州立大学博士課程修了。Ph.D.取得。85年創価大学講師。87年創価大学ロサンゼルス分校が開校し副校長に。93年ロサンゼルス分校をアメリカ創価大学ロサンゼルス・キャンパスと改め、同大学長に就任。

平和と共生の文化を キャンパスから発信

学長 羽吹好史 さん

創価大学経済学部卒業
アメリカ創価大学 学長

Habuki Yoshinobu

世界の平和と文化に貢献する地球市民を育てるため、創価大学は、創立以来、国際交流に力を入れてきました。現在、交流協定を結ぶ大学は、世界四十二カ国・地域の九十四大学。毎年二五〇名を超す学生が海外で学んでいます。創価大学の学生にとって、世界がキャンパスなのです。

二〇〇五年五月、アメリカ・カリフォルニア州にあるアメリカ創価大学オレンジ郡キャンパスから、一期生百名の卒業生が巣立った。アメリカ創価大学オレンジ郡キャンパスは、二〇〇一年、リベラルアーツ型の教育を行う四年制の大学として開学し、今春の卒業生は、コロンビア大学やエール大学など、世界屈指の大学院に多数進学している。微笑みを交わし、あるいは抱き合って卒業を祝う学生たち。そんな光景を、特別な感慨をもって眺める人がいた。学長の羽吹好史さんである。



「うれしいというか、さびしいというか、複雑な心境です。いっしょに大学をつくってきた仲間ですからね」
羽吹さんもまた、三〇年前、創価大学を卒業した「一期生」である。「一期生」には「一期生」の気概がある。創立者である池田大作氏は、開学間もない大学を折にふれては訪れ、学生たちに親しく励ましの声をかけて歩いた。その姿に接するたび、羽吹さんの胸に自分たちが

大学の歴史をつくっていくのだという思いがわきあがったという。

「ですから僕も、なるべく学生の近くにいたいと思っっているんです。学長の携帯電話の番号を、学生が知っている大学なんてないでしょうね」
毎週月曜には、学生の代表とミーティングがある。携帯電話には、大学運営に関する提案や連絡がひんばんに寄せられる。アメリカ創価大学では、新入生にノートパソコンと大小二つの

プラスチック容器が渡される。容器は食堂から食事を持ち帰るためのものだ。

「最初は発泡スチロール製の使い捨て容器を使っていたんです。でも、学生たちから環境によくないという指摘があつて、三年目から何度も使えるものに変えました」
羽吹さんには、今、二つの夢がある。一つは、創立二〇周年までに、現在四〇〇〇人の学生数を倍の八〇〇〇人規模にすること。もう一つは、アメリカ創価

大学ならではのキャンパス・カルチャーを築くことだ。学生は、半数はアメリカ人だが、あとの半数は世界三二カ国・地域から来ている。しかも、三年次には海外留学が必修で、日本の創価大学にも、日本語や日本文化を学ぶために、毎年二〇〇〇三人が訪れる。

「多様な文化の共存が当たり前であるような環境の中で、地球市民としての思いやりの心を育て、この大学から平和と共生の文化を発信していきたい。その芽はすでにあると思います」
アメリカ・ソロー協会前会長のロナルド・A・ボスコ博士は、一期生の卒業式に寄せた一文で、「私はアメリカ創価大学を二度訪問し、学生の精神の高揚と寛大さを目の当たりにした。学生は、教師や書物からだけでなく、それぞれが持ち寄った英知に耳を傾け、認め合うことによって学んでいる」と語っている。二〇〇六年からは、日本の創価大学からアメリカ創価大学オレンジ郡キャンパスへの派遣留学もスタートする。



創価大学の創立者である池田大作SGI会長は、世界中の大学・学術機関から182に上る名誉学術称号を授与されているが、モスクワ大学、北京大学など、海外の大学から招かれてこれまで31回に及ぶ講演を行っている。アメリカのハーバード大学では、1991年に「ソフト・パワーの時代と哲学」、93年に「21世紀文明と大乘仏教」と題する2度

の講演を行った。また、94年には、世界最古の大学、イタリアのボローニャ大学で「レオナルドの眼と人類の議会—国連の未来についての考察」と題する講演を行った。